

韓国小都市におけるカトリックと学校教育¹⁾

秀 村 研 二

はじめに

本稿は多くのカトリック信者が存在する韓国慶尚北道漆谷郡倭館(ウエグァン: 왜관)地域²⁾のカトリック教会と地域社会に関する研究の一部として、教会と教育の関係についてのスケッチである。なお倭館地域のカトリックと地域社会の重層性もしくは重層的な性格については今後の研究によって詳細を述べる予定である。さて本稿で扱う倭館地域では、人口に比してカトリック信者が韓国平均の約2倍と多く、それは地域社会の持つ歴史と教育とそして修道院の存在とが相互に深くびついていることにある。信者数の多さは倭館邑の人口(2015年)3万2000人に対して信者は5000人であり比率が16%と顕著である。³⁾

このようにカトリック信者が多い理由の一つが韓国のカトリック教会の歴史において、特に古くからの信者を擁する地域の歴史である。最初にこの地域におけるカトリックの初期の歴史について簡単に触れておく。朝鮮王朝におけるカトリックの初期の迫害時(1868年丙寅迫害)に、大邱にいた信者が逃れてきたのがシンナムコル(신남골: 慶尚北道漆谷郡枝川面蓮花里)であり、そこからさらに山間に逃げ込んで形成した教友村⁴⁾がハンティ(한티: 慶尚北道漆谷郡東明面ハンティ)である。そのため布教の自由化とともにこの地域に作られた最初の聖堂は洛東江の船着き場近くに1894年に作られた洛山(낙산: 낙산)聖堂、現在の佳室(카실: 가실)聖堂であり、これは慶尚北道では大邱の桂山洞(케산동: 계산동)聖堂(現在の大邱教区主教座教会)について古い歴史を持つ聖堂である。この佳室聖堂を中心として、教友村で信仰を守り続けてきた信者たちを中心として公所(콘소: 공소、司祭が常駐しない施設で信者数が増えると司祭が常駐する聖堂となる。)がつくられ信者数は増えていった。

そして佳室聖堂所属の公所が倭館にも作られ、その公所を基にして1928年に佳室聖堂から分立するかたちで倭館聖堂が設立された。この間、倭館への公所の設立と聖堂の建設をめぐる力があつたのが当時精米所を営み、倭館有数の経済人であった鄭在文であり、彼が初代の倭館聖堂総会長を務めた。⁵⁾倭館聖堂(煉瓦造りのロマネスク様式)は倭館邑の背後の丘の中腹に作られていて、1928年に撮られた写真から判断すると当時の倭館邑内では目立つ西洋建築であつたと思われる。

1. 倭館におけるカトリックによる学校教育の始まり

倭館地域の高等教育機関の特徴として注目すべきなのは、カトリックによる私立の純心高等学校、純心女子高等学校が近年まで漆谷郡内の高等学校教育を一手に引き受けていたことだろう。漆谷郡内の純心以外的高等学校は現在では各面（行政単位、日本の行政村に相当）毎におかれている。純心高等学校、純心女子高等学校（1978年に純心高等学校より分離）が1952年に設立されたのに対して、公立の若木（ヤンモク：양목）面に若木高等学校が設立されたのが1973年、その次は1981年に枝川面に新洞高等学校（1987年に漆谷高等学校に改称）が設立されるまで待たなければならなかった。それ以降は架山面と岐山面を除く漆谷郡内の三つの邑と三つの面に公立高校が設置されている。なお漆谷郡内で人口が一番多い倭館邑には公立の高等学校は存在しない。これらの公立高校が設置される以前は、隣接する大都市大邱や工業都市亀尾に進学する学生も多かった。この大邱への進学は現在でもさほど変わっておらず、成績上位の者は、より良い進学先として大邱や亀尾の高等学校を選択している。逆に言うならば大邱の高等学校に通うだけの学力と経済力（下宿する学生もいる）があれば漆谷郡内で進学する理由はあまりなかったとも言うことが出来よう。

純心高等学校は漆谷郡内で最初に設立された高等学校であるが、その前身としてより古い歴史を持っている。それは1936年に設立された小花（ソファ：소화）女学院にまで遡る。漆谷郡内の初等学校（日本の小学校にあたる）の学校名と創立年を示したものをみると〔漆谷文化院 2016:592-637〕、日本の植民地下において各邑面（ウプ：邑は日本の町、面は村に該当する行政単位）に初等学校を設立することになり、1936年までには各面に初等学校が設けられた。漆谷郡内に最初に設けられた学校は、1915年開校の倭館普通学校（現在の倭館初等学校）であり、第2次世界大戦中の1943年に石田国民学校（現在の倭館中央初等学校）が開校するまでは倭館邑内では唯一の公立学校であった。それでは公立学校が存在する倭館邑内になぜ小花女学院が設立されることになったのだろうか。

小花女学院がつくられたのは次のような経緯からであった。1932年に倭館聖堂の第3代主任司祭として赴任したフランス人神父であるロベルト神父（Rbert Richard、韓国名はイ・ドンヒョン）は貧しく不遇な人々に対する関心が高かった。なお倭館聖堂は前述のように洛東江の渡し場があった佳室（カシル）の洛山聖堂から分離する形で設立された聖堂で、1928年に赤煉瓦造りの建物として竣工、1929年5月に聖堂として出発した。⁶⁾ ロベルト神父は聖堂の横に医療を受けられない地域住民のために施薬所の設置を計画し、フランスの父母からの寄付を元に建物を建てたが、そこで働く修道女の招請が保留状態になっていたため使われないうちになっていた。その建物の活用方法として、ロベルト神父は初等教育を受けられない女子のための教育に目を向けた。

当時のカトリック教会は「文盲退治」を通じた宣教と民衆啓蒙の重要性を強調していた時期だった〔純心女子中学校・純心女子高等学校 2016:43〕。前述のように倭館邑内には倭館普通学校があったが、比較的経済に恵まれた男子学生のみが通っていた。⁷⁾ 4年制の普通学校に通えない男子学生のためには倭館邑には2年制の私立同昌学院があったが、女子のための教育機関はなかった。そのためロベルト神父は就学機会に恵まれない10代の女性のための教育がより必要だと考えたのだった。1936年5月15日に私設学術講習会倭館小花女子学院が認可（1年ごとに更新）を受けて開校した。

初代学院長はロベルト神父である。教師としてロベルト神父は女子修道会であるシャルトル聖パウロ会に修道女の派遣を要請し、3名の修道女が聖堂の修道院分院に派遣された。⁸⁾ 学生募集に対して77名の応募があり、2学級での出発であった。地方の邑程度の小さな町でこのような試みがなされたのはロベルト神父の力に依るところが大きかったと考えられるし、修道女の派遣に応じたこの地域のカトリック(大邱教区)の積極的な在り方も考えなければならぬだろう。

最初の卒業式は3年後の1939年3月におこなわれた。小花女学院の修学年限は4年であったが、最初の学年は成績優秀者24名を1年の2学期からは2学年として飛び級をさせたため、3年で修了になったのである。小花女学院では4年間で普通学校の6学年分の教育課程が教えられたという。なお学生にカトリック信者が多かったわけではなかった。そのためカトリックの教理教育にも力を注いだ。⁹⁾ しかし宗教教育は総督府によって禁止されていたので非公式的な授業であり、放課後におこなわれることもあったようである。その結果、在学生の多くが入信したようであるが、それとともに子どもを通して家族や地域社会にカトリシズムが広まっていったことが考えられる。毎年の新入生の入学によって施薬所の建物を転用した校舎では収容できなくなり、校舎の増築がなされたが、その費用の多くがロベルト神父のフランス在住の家族からのものであった。

この時代になされた教育は日本の植民地当局の教育政策に従わざるをえなかった。その一つが日本語教育や日本的な道德教育である「修身」であり、歴史や地理などの教科も日本中心のものであった。一方で「算術」や「珠算」のような実務的な科目、また当時の女性教育で必須とされていた「手芸」などは新女性¹⁰⁾を象徴するものでもあり、それが都市ではない農村地帯の倭館でもおこなわれていたことに注意したい。さらに朝鮮総督府は神社参拝の強制を国民儀礼として求め、それに対する反発もあったが、韓国のカトリック教会は全体として参拝を容認したため生徒たちも倭館邑内にあった神社に行き参拝をおこなった。¹¹⁾ 1941年に学院長は第2代のフランス人ピエーレ神父から鄭在文アンドレア倭館聖堂総会長に代わった。

1945年8月の日本の敗戦により朝鮮半島には植民地からの解放がもたらされたが、半島南部にはアメリカ軍による軍政がひかれた。その中で1946年9月7日には純心初等学校が設立され、小花女子学院の建物と教職員の一部が移り、小花女子学院は聖堂の地下に移った。¹²⁾ その後、小花女子学院は新入生をとらず1947年8月に閉校した。小花女子学院は11年間に公立の普通学校と同程度の教育を女性に対して施し、約500名の卒業生を倭館地域に輩出し、純心初等学校を後継として幕を閉じることとなった。

さて農村地帯であった倭館において私立学校での女子教育が可能であったのは何故であろうか。当時の倭館聖堂がロベルト神父をはじめとして教育に対して熱心であったこともその要因であろう。韓国カトリック教会の雑誌である『京郷雑誌』1938年12月号は「倭館教友の真心」と題する記事を載せているが、それは倭館聖堂が全国的にもカトリック教会内部でも注目される存在であったことを示していると考えられる。それによると倭館聖堂は鄭アンドレア信者総会長を中心に活動に熱心であり、教務金(信者が教会に納める献金、日本のカトリック教会では教会維持費という)を含めた教会の年間の収入が当時の金額で3600円ほどであったといい、1人平均3円以上になるといふ。これは朝鮮半島全体のカトリック教会の最高水準の成績だといふ。¹³⁾ 特に豊かとも言えない倭館において、教会に対する信頼(もしくは忠誠)があったからこそ資金面での負担にも応えたのであろう。であるからこそ教会も小花女学院を運営することによって地域社会に還元しようとした

と考えられるのであろう。

2. 植民地解放後のあゆみ

前述のように1946年に小花女子学院から純心初等学校への転換がおこなわれたのだが、それには植民地解放後の韓国¹⁴⁾の教育行政の変化(教育法の改正)があった。紆余曲折を経て最終的には6-3-3-4制(初等教育である国民学校は義務教育とされる)が1951年には確定することになる。また男女共学が原則とされたのも大きな変化であった。このような中で韓国のカトリック教会の学校運営も変わらずをえず、それまでの小学校教育は中等高等学校に、それまでの聖職者養成機関であった神学校が神学大学となった。

初等学校の義務教育化は小花女学院に影響を及ぼすことから最初は小花高等女学校としての存続をめざした。設立の中心になったのは小花女学院を運営していた倭館聖堂の信者たちであったが、漆谷郡内の他の聖堂の中心メンバーたちも含まれていた。純心教育財団の財政的基盤として土地2万坪以上がこれらの人々によって用意された。アメリカ軍軍政庁に申請された認可申請書には高等女学校ではなく純心女子初級中学校としてであり、1946年8月に生徒92名で現在の純心中・高等学校の場所に開校した。これはカトリックの大邱大教区内では最初に設立された中高等教育機関であった。

しかし倭館地域には男子が通える中学校以上の学校がなかったので、男子学生も通える学校の要望が地域社会から出てくることになる。そのため1946年11月には男女共学純心初等中学校(男子部と女子部)に変えて60名の男子学生が募集された。共学とはいえ男女の校地は別であった。¹⁵⁾1949年には大邱教区の援助も受けて新しい校舎が完成し、男女が同じ校舎で学ぶようになった。また1949年からは夜間部1学級を設置して勤労学生の育成にもあたった。

その1年後の1950年6月25日に始まった朝鮮戦争の影響は大きかった。この倭館地帯一帯は、南下した北朝鮮軍とそれを押し止めようとする国連軍(主力はアメリカ軍と韓国軍)との間で洛東江をはさんだ激しい戦闘が繰り返される最前線となったからである。¹⁶⁾アメリカ軍はB29(横田基地から飛来)による爆撃をおこない、8月16日の爆撃により倭館邑内もほとんどが消失する大きな被害を被った。戦争により倭館の住民たちの多くが避難を余儀なくされた。純心初等中学校の校舎はアメリカ軍部隊の駐屯地として使われた。その後米軍の仁川上陸作戦(9月16日)とその後の戦線の北上により、10月以降には避難していた人々は避難先から倭館に徐々に戻ることができるようになった。邑内からは少し離れていたため学校の校舎は焼失は免れたが、爆撃や機関銃による銃撃の被害を受けており授業再開には復旧作業が必要であった。戦争開始時に在籍していた540名の学生のうち、10月に復学できたのは180名であった。¹⁷⁾戦争は膠着状態で線戦が行ったり来たりし、また倭館地域では戦災の傷跡が癒えない中、1951年7月には遅れていた第3回卒業式(卒業生男子42名女子19名)、1952年3月には第4回卒業式(卒業生男子74名女子29名)がおこなわれた。

中学校の卒業式はおこなったが、卒業生の進学先がこの倭館地域にはなかった。卒業生のうち余裕のある家庭の子弟は大邱の高等学校に進学することができたが、大多数は進学を諦めるしかなかった。純心教育財団はそのような学生たちの進学先として高等学校の設立をめざすことになり、

1952年4月に6学級の純心高等学校を開校した。こうして倭館地域最初の高等学校はこのようにカトリックによる私立学校としてつくられることになったのである。これは朝鮮戦争の混乱の中であれ、この地域の聖堂を中心としたカトリック信者たちの熱意の結果であったといえよう。

前述のように純心高等学校はこの地域唯一の高等学校であり、中学校も若木邑に1956年に公立の若木中学校が作られるが、その後は1970年の倭館中学まで作られていないので、倭館邑においてはやはり唯一の中学校でありつづけた。そのため純心高等学校の行事は保護者のみならず倭館邑の人々にとっても大きな関心をもたれるものとなった。学芸発表会は、舞踊、ピアノ演奏、合唱、演劇、講演会などがなされ、学生たちの日頃の活動の成果が発表された。そして地域の多くの人々にとってそれらの演目は、彼らが初めて経験する目新しい文化行事であったことを強調しておきたい。倭館地域において、これらの近代的な文化活動は純心高等学校が媒介者となってもたらされていたのである。

一方、身体の運動面では植民地時期から、各初等学校(国民学校)での運動会はあったものの、地域全体にまたがる運動会はおこなわれていなかった。それであるため、純心中・高等学校の運動会は後に漆谷郡の郡民体育大会が1962年に始まるまでは、漆谷郡地域唯一のスポーツ行事でという性格をもつものでもあった。この純心中・高等学校の運動会では中・高等学校のスポーツ競技もおこなわれるが、その他に漆谷郡内の国民学校対抗競技や行政単位の面邑対抗の競技もおこなわれ、応援に来ている住民たちを巻き込んで盛り上がったという。これらの対抗戦(面邑対抗以外に職場対抗もあった)には、漆谷郡庁が優勝旗や優勝カップを用意したということから、学校行事が学校だけではなく地域の行事となっていた姿をみることができる〔純心女子中学校・純心女子高等学校2016:74〕。

当時の韓国では女子よりも男子への教育が優先されており、また純心高等学校がこの地域唯一の高等学校ということが理由となって男子の学生数が増加することとなり、男子部は1954年の新入生から2学級となった。そのために新校舎が建築されることになるが、朝鮮戦争後の物資不足のなかでの建設は簡単ではなかった。建築資材の確保にはアメリカのカトリック団体の援助だけではなく、アメリカの援助団体からの寄付に依るところが大きかったといわれる。1950年代末には漆谷郡内の小学校数は30を越え、中学校も3校に増えていたが、高等学校は純心高等学校が唯一の存在であるのは変わらなかった。それは大都市大邱に通学可能なため、経済的に余裕があったり成績の上位の学生は大邱の高等学校に進学する傾向は以前と変わらないにせよ、地元志向の強い学生の受け皿として純心高等学校が役割を果たしていたとみることができよう。

学校としては一応の体制をとることは出来ていたが、運営に当たる純心教育財団の基盤は確固たるものではなかった。それは1952年に高等学校の認可を受けてから、1954年に女子部の校舎を建ててもいたからでもある。

3. 聖ベネディクト会倭館修道院による運営

現在、純心教育財団は聖ベネディクト会倭館修道院(以下倭館修道院)によって運営されている。この経緯について次に見てみよう。ドイツの修道会聖ベネディクト会オティリエン連合は1909年

から朝鮮半島及び間島（現在の吉林省朝鮮族自治州）で宣教活動を続け、日本による朝鮮半島の植民地期には現在の北朝鮮感興南道元山近くに徳源修道院、中国吉林省延吉に延吉修道院を設立運営し、また修道院の教育活動として学校（海星学校）を運営していた。¹⁸⁾1945年8月以降、徳源修道院はソ連軍や朝鮮労働党によりまた延吉修道院は中国共産党により活動に制限を受け、活動を停止した。その後の朝鮮戦争（1950～1953年）によって38名の犠牲者を出し、生き残ったドイツ人の修道士たちは本国に送還された。韓国人の修道士たちは様々な方法で韓国に逃れ、釜山で集まって共同生活を始めていた。その後大邱に移り、1953年には倭館監牧代理区¹⁹⁾が設立され聖ベネディクト会修道院の神父が監牧代理に任命された。1954年には倭館に土地を確保し、1955年に倭館に新たな修道院の建物が建築されドイツ人修道者たちも戻って来て活動を再開した。多くの神父を擁していたため大邱教区からは倭館地区を含む慶尚北道北部の司牧を委任されることとなった。²⁰⁾また1956年1月にはローマ教皇庁から倭館修道院は正式の修道院として認可を受けた。²¹⁾

大邱教区の中で多くの修道士を擁する倭館修道院は倭館監牧代理区内の聖堂の司牧を担当するだけではなく、それまで純心教育財団によって運営されていた学校の運営についても教区から協力を要請され、純心教育財団の運営を引き受けることになった。まず1955年に中学と高等学校を分離して、中学校の運営は純心教育財団があたり、高等学校の運営を修道院がおこなった。1961年に純心教育財団の運営を修道院が引き受けて、中学校と高等学校を財団が運営することになった（後に女子の純心女子中・高等学校と男子の純心中学校、純心高等学校に分離）。

倭館修道院が純心教育財団の運営を引き受けたことで特筆されなければならないのが、1956年に設立された聖マオロ寄宿舎である。この寄宿舎は修道会が将来の修道士や神父の候補者を全国から集めようとしたものである。寄宿舎で生活しながら純心中学校・純心高等学校に通うもので、学費や食費などの費用は全て修道会が負担した。朝鮮戦争後の混乱期でもあり、経済的に困難をかかえ中学・高等学校進学を諦めざるをえないカトリック信者の子弟にとっての進学機会を与えるものであった。

倭館修道院の初代院長ティモテオ神父はスイス出身であり、スイスの修道院では修道院毎に宗教指導者養成のための学生寄宿舎をもっていたため、倭館修道院の発足時より学生寄宿舎設立が計画されていた。最初の目的は神父養成であり、寄宿生は望めば神学校への進学が可能であった。しかし実際には誰もが神父をめざすでもなかったので、修道院と同じように規則的な集団生活をおくることによって模範的なカトリック信者養成を図るものという一面もあった。寄宿舎の入り口には「燭台の上の燈になれ」との聖句（ルカによる福音書11章33節）が掲げられていたことにもそれを見ることができよう。

1957年3月に聖マオロ寄宿舎の祝福式がおこなわれたが、そこには慶尚北道知事や漆谷郡守²²⁾が出席していた。一地方の高校生の学生寄宿舎、それもカトリックの施設に対する対応としては異例と考えられるが、当時の西ドイツと繋がりのある倭館修道会への配慮であったかもしれない。

寄宿舎は1984年まで27年間運営されたが、1970年までの前半14年間は神学生を多く輩出したが、後半14年間はどちらかという優秀なカトリック信者を育てる全人教育的な側面が強かった〔純心中学校・純心高等学校 2016:127〕。ドイツと繋がりがあつた修道院の施設であつたため、当時の韓国では手に入らないような運動施設や図書などが利用できたという。²³⁾またドイツ人神父が直接教える英語教育やドイツ人神父が直接持ち込む外国の映画の鑑賞は、それらに直接接することの出来

ない当時の他の学校に比べると恵まれたものであった。27年間に寄宿舎で学んだのは350名ほどになり、そのうち神父になったのが30名ほどである。神父にはならなかったものの卒業後も倭館の地に留まった寄宿舎出身の人材も少なくない。その人々はカトリック信者としての教育を受けているので、倭館聖堂の信者の中でも注視される存在である。

1984年に寄宿舎は廃止されるのだが、その要因は韓国の中学高校の入試制度改変であった。1970年代に当時の軍事政権は過熱する教育熱を押さえ込むために強権的な政策をおこなった。その一つが1974年の高校入学の平準化であり、居住地の高校への進学割当て制であった。聖マオロ寄宿舎は全国から優秀なカトリック信者の学生を集めることで運営されていたので、その前提が崩れたことになる。また韓国社会の経済成長とともに倭館修道院に対する外国（主にドイツ）からの援助が少なくなり、修道院が自立していかなければならなくなった財政的な問題もあり、寄宿舎の閉鎖を決定した。

おわりに

倭館地域にある唯一の高等学校として聖ベネディクト修道会が運営する純心高等学校がある。歴史的に倭館において女子教育を始めて手がけたのは小花女学院であったこと、それを運営したのはカトリックの倭館聖堂であった。この洛東江中流域の一地方の小都市での植民地期における倭館の女子教育はこのカトリックの小さな学校が担っていたのである。植民地からの解放以後は男子の中等教育機関としての役割も果たしていく。

倭館聖堂は倭館の邑内（ウンネ：町）の外れの丘の上にあり、小花女学院の場所、つまり現在の純心中学校・純心高等学校があるのはその聖堂のある丘の麓に当たる場所である。そして朝鮮戦争が終わる時期に、聖ベネディクト修道会が聖堂のある丘に作られる。聖堂のある丘が、聖堂の信者たち、学校の生徒たち、修道院の修道士・神父たちによって共有された。

この丘に聖堂を建てるのにも、小花女学院を設立するのにも、また聖ベネディクト修道院のための土地の確保に尽力したのも、倭館聖堂の信者総会長を務めていた鄭在文であった。鄭在文の存在がなかったならば、この三つのカトリック機関が倭館という一個所に集まっていたかどうか疑わしい。

今日でも、この三者は堅く結びついており倭館におけるカトリック信者数の多さに関係している。倭館修道院が運営する純心でカトリックの信仰に触れて信者となる割合は少なくなく、そして信者たちは倭館聖堂に通う。郡庁を初めとして信用金庫や農協などの機関にも多くの純心卒業生がおり、その一定数がカトリック信者である。この現在の倭館地位域におけるカトリックの重層的なあり方については稿を改めてのべたい。

注

- 1) 本研究は JPSPS 科学研究費 15K03033 基礎研究 C「生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究：韓国社会の事例を中心に」(研究代表：東京大学本田洋) による研究成果の一部である。
- 2) 倭館の地名の由来は次のようである。1904年に京釜線（朝鮮鉄道）が建設される際に倭館駅が設置された

が、駅舎がおかれた場所の元来の地名は回洞(フェドン)であった。倭館は洛東江対岸の若木面にあった地名であり、最初の計画ではそこに京釜線倭館駅が設けられることになっていた。しかし種々の条件により現地に駅が設けられ、駅名はそのまま倭館が使われることになった。駅名が初めにあり、その後駅名である倭館が地名として使われるようになったのである。1911年には警察の駐在所が倭館駐在所として設置されているので、その頃までには倭館の地名が定着したと推測されている[チャン・ヨンボク 2014]。

- 3) 信者数は人口統計調査で自分の宗教について主体的に答えたものであるが、だからといって皆がカトリック教会(もしくは聖堂)と関係を持っているとは限らない。例えば本稿で対象とする倭館聖堂の場合、信者数はおよそ3000人だが実際に一週間のうちに1回以上ミサに参加している信者はおおよそ1000人ほどに過ぎない。これは韓国のカトリック教会でほぼ共通していて、信者(洗礼を受けた)の3分の2がミサに出席しておらず、カトリック教会においては大きな問題として認識されている。プロテスタント教会の信者よりもこの教会に通わない信者の比率が高いのには構造的な理由があると思われる。このミサに出席しない信者のことをカトリック教会ではネンダムチャ(冷淡者)と呼んでいる。ミサに出席しない理由は信仰の問題もあるであろうが、多くは信仰以外の問題に起因しているようだ。韓国のプロテスタント信者では同じような問題、つまり教会の牧師などの聖職者や協会内部の人間関係などに問題を感じたならば他のプロテスタント教会(同じ宗派であっても近くにくらでも乱立している)に移れば良い。プロテスタント教会では教会間の移動は非常に多く、それが韓国のプロテスタント信者の増加の原動力の一つであったと考えられる。それは移動性の高い韓国社会がプロテスタント教会にも反映されていると考えても良いだろう。それに対して、カトリック教会では特定の地域(教区)に一つの教会をもうけて制度的に移動を制限しているために、原則的に教会間の移動は難しい。そのような制度的な制限のために信者は問題を感じると出席しないという選択をすることが多い。そして一度「冷淡者」になってしまうと、それからの回復はなかなか難しい。これは移動の自由をめぐるカトリック教会の制度的な問題であると言える。この点については現在ではあるが、限定的に移動が認められている。
- 4) 教友村とは迫害を受けた信者たちが迫害を避けて山の中などに信者たちが作った集住村のことである。近年では教友村の跡は聖地として巡礼の対象となることもある。本稿でも触れたハンティ(標高900メートルの山中にある)も殉教した人の墓地を整備したり、かつての教友村の家屋を復元したり、また佳室聖堂からの巡礼路が整備されるなど聖地化が進んでいる。
- 5) 鄭在文(チョン・ジェムン: 정재문 1876 ~ 1954年)は大邱で生まれ、16歳で洗礼を受けてカトリック信者(洗礼名アンドレア)となる。1906年頃倭館近くの新洞で精米業を営んでいたが、洛東江の船便が利用出来、また鉄道の駅(京釜本線倭館駅)もあるのでより経済的に発展性のある倭館に移り住んで、南一精米所を設立した。また後には精米した米を運送する事業も始めたようである。自宅に公所(コンソ)を設けるなど宗教活動にも熱心であり、1928年に倭館聖堂を建設する際には敷地と建設資金を寄付するなど大きな貢献をしている[倭館聖堂 1978]。また小花女学院の第2代校長を1941年~1947年まで務めている。
- 6) 聖堂の位置は倭館の邑内背後の小高い丘に位置しており、当時の写真を見ると教会の尖塔が邑内からよく見える。人々にとってカトリック教会は新しいものとして迎え入れられたと想像される。倭館邑内には1904年設立のプロテスタント教会である倭館教会(長老教会)が設立されていたが、1923年に建て替えられた礼拝堂でも朝鮮式の瓦屋根の建物であった。[漆谷文化院 2016: 1883]
- 7) 植民地期に植民地政府によって設けられた普通学校には、経済的余裕がある家庭であっても日本の教育を嫌って子息を通わせないことが少なくなかった。両班(ヤンバン: 양반)であることを自負する家庭では特にそうであり、伝統的な書堂や書院において儒教的な教育を受けることも続いていた。しかし、植民地支配の進行と共に両班の子弟が近代学校教育を受けるようになり、上級の学校を目指すようになった。
- 8) 聖堂には女子修道院の分院が設置され、修道女が配置されている。神父だけでは信者の多くを占める女性に対する活動に困難をもたらすからである。
- 9) 韓国のカトリック教会では信者に対して信者としての基本的な教義や祈祷など信仰生活に必要な事項を教えることを教理教育と呼んでいる。日本のカトリック教会では教理をカトリック要理という。
- 10) 朝鮮における新女性については[井上和枝 2003]
- 11) 神社参拝の強制に対してはプロテスタント教会の反発が大きかった[閔庚培 1981]。
- 12) 聖堂の地下とはいえ聖堂自体が階段を登って入る構造なので実際には1階に近く、聖堂の横に入り口がある。
- 13) 「倭館教友の真心: 教務金成績で本誌上で何回も掲載した慶北倭館教会は所属教友1200名程度で早くか

ら朝鮮カトリックの経済的独立の精神を覚醒した地方だ。この地方は教会の事業だといういつも率先活動する本堂（総）会長鄭アンドレア氏から全ての（各団体の）会長、信者に至るまで自分の教会を愛するに切実であり物心両面に一致協力するので、特に物質的活動の概略を見ると次のようである。

今年度に1039円30銭の教務金と純粋に本地方教友たちが供えた230台のミサ礼物とその他様々なもので教会に供えられた金額総計が3612円82銭というのだが、一人平均3円以上になる。

さらにこの教会の事業としては女子修道院（修道女5人）、初等学校の小花女子学院（現在4学級160名収容）を経営しており、今年は公費5千円余りをあげて校舎を増築したという。この公費は近隣地方の匿名神父と校内の有志二名と本堂（倭館聖堂）神父の協力があったからこそ可能であり、この教会の今年度総経費は8千円を超えるという。そういうわけで朝鮮の各地方の男女信者たちが倭館の教友たちのように心を開き教会を愛する心を持つなら朝鮮カトリックの将来がどんなに頼もしく、どんなに輝く光彩を出すだろうか。』『京郷雑誌』1938年12月号（1938.12.15）p.572-573〈秀村訳（ ）は秀村による追加〉。

- 14) 1946年は大韓民国成立（1948年）以前ではあるがここでは当時アメリカとソビエトによって分断されていた38度線より南の朝鮮半島南部を韓国とする。
- 15) 男子学生用の校舎は最初の3年間は植民地時代に日本人用小学校であった建物を漆谷郡から借りていた。〔純心女子中学校・純心女子高等学校 2016:56〕
- 16) 朝鮮戦争の激戦地の一つである多富洞（タブドン）は漆谷郡架山面にある。また洛東江に架かる道路橋（倭館鉄橋）は北朝鮮軍の南下を防ぐためにトラス一つ分が爆破されたが、復旧の上人道橋として現存する（登録文化財406号）。現在、洛東江岸には漆谷護国平和記念館、激戦地だった多富洞には多富洞戦跡記念館があり、戦闘の最前線だったことを展示で示している。
- 17) 朝鮮戦争中の学校の状況に関しては80周年を記念して発刊された校史に詳しい。
- 18) 聖ベネディクト会オテリエン連合の韓国（当時の国名は大韓帝国、1910年に日本の植民地朝鮮となる）での活動は1909年に始まる。1911年に京城（現ソウル）栢洞（現ソウル市鐘路区恵化洞）に修道院を完成させた。また1910年には韓国進出の目的であった崇工学校を設立し実業教育をおこない、1911年には教員養成のための崇信学校も作ったが朝鮮総督府の認可を得られず廃校となった。ソウルでの修道院活動は朝鮮半島で活動していたフランス海外宣教会との関係で難しかった。聖ベネディクト修道会は新しく半島北部に設立された元山代理区での宣教を委託されたのを機会に咸鏡南道徳源に拠点を移した〔秀村研二 2019:82〕。
- 19) 監牧代理区は教区内の正式な単位として設けられることがある。
- 20) 倭館修道院が監牧代理区として管轄したのは、金泉郡、漆谷郡、尚州郡、善山郡、金陵郡、星州郡、文開郡である。
- 21) 修道院の倭館定着については〔秀村 2019:83-84〕を参照。
- 22) 韓国では郡は朝鮮王朝以来重要な行政単位であり、その責任者が郡守である。
- 23) 聖マオロ寄宿舎は当時の倭館では唯一の上下水道完備の建物であった。

参考文献 *ハングルの原著名を（ ）内に示した。

- チャン・ヨンボク 2014 「漆谷倭館の地名の由来」『漆谷文化』10号、pp.53-54、漆谷文化院（장영복 2014.12 「칠곡왜관의 지명유래」『칠곡문화』10호, pp.53-54, 칠곡문화원）。
- 秀村研二 2019 「聖ベネディクト会修道院と韓国の一地域社会：韓国慶尚北道漆谷郡倭館邑への定着過程をめぐって」『明星大学全学共通教育研究紀要』1, pp.81-86。
- 井上和枝 2003 「朝鮮新女性の『近代』受容と『近代』体験－恋愛からファッションまで」『韓国朝鮮の文化と社会』2号、pp.81-112、韓国朝鮮文化研究会。
- 閔庚培（金忠一訳）1981 『韓国キリスト教会史』新教出版社（閔庚培 1975『韓国基督教会史』）
- 純心女子中・高等学校 2016 『百合純心80年史（1936～2016）』（순심여자중·고등학교 『百合순심80년사（1936～2016）』）
- 純心中学校・純心高等学校 2016 『雄飛純心80年史（1936～2016）』（순심중학교·순심고등학교 『雄飛순심80년사（1936～2016）』）
- 漆谷郡・漆谷郡誌編纂委員会 2016 『漆谷郡誌』上（칠곡군·칠곡군지편찬위원회 『漆谷郡誌』上）
- 倭館聖堂 1978 『倭館半世紀－倭館天主教會五十年史－』天主教倭館聖堂。